



伊藤忠實
鹿兒島鎮定録



10

15

20

25

30

A439
2

鹿

児

嶋

大橋堂梓

鎮

定

録

拾三編



48-7715

鹿兒島の賊中て

振義隊の長とて

兼て其 貴嶋清

名の聞ゆる

貴島

清と

といふ

前名

宇太郎と

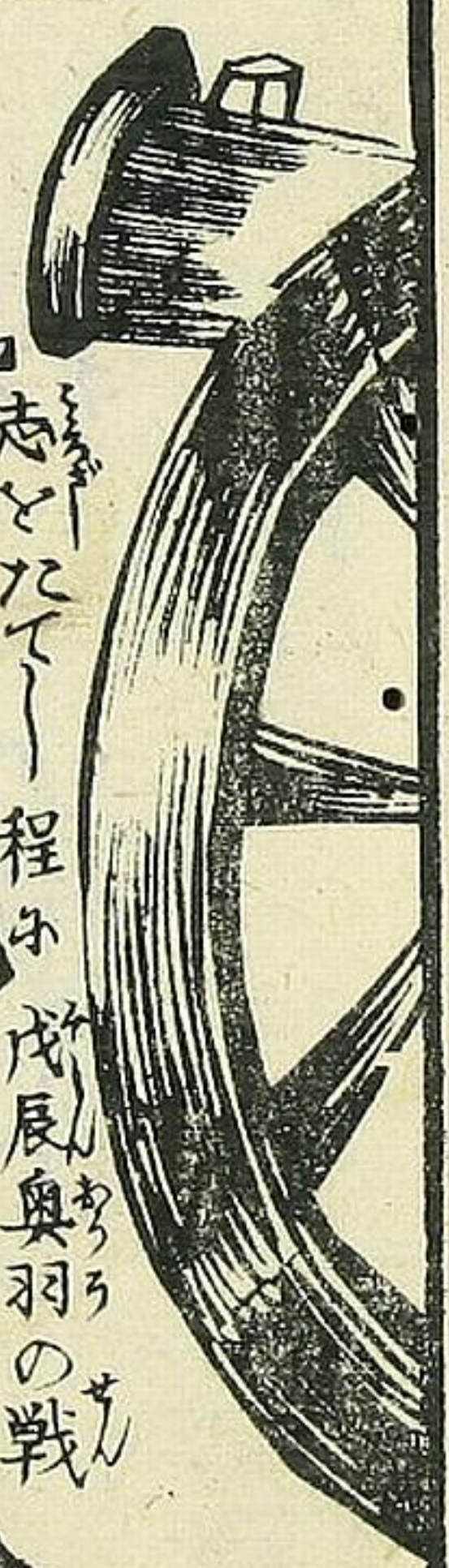
号し鹿兒

島市中南林寺の門前住故

門前町人といやめて城中の少年等友とせぬ

と口惜しく思ひ武藝学問不勉弦一いつら此駐之と云ふんと

鹿兒島鎮定録



志とて一程ハ戊辰奥羽の戦

数度あり名

頭して後ハ

隊長と云ふ

或日

藩主

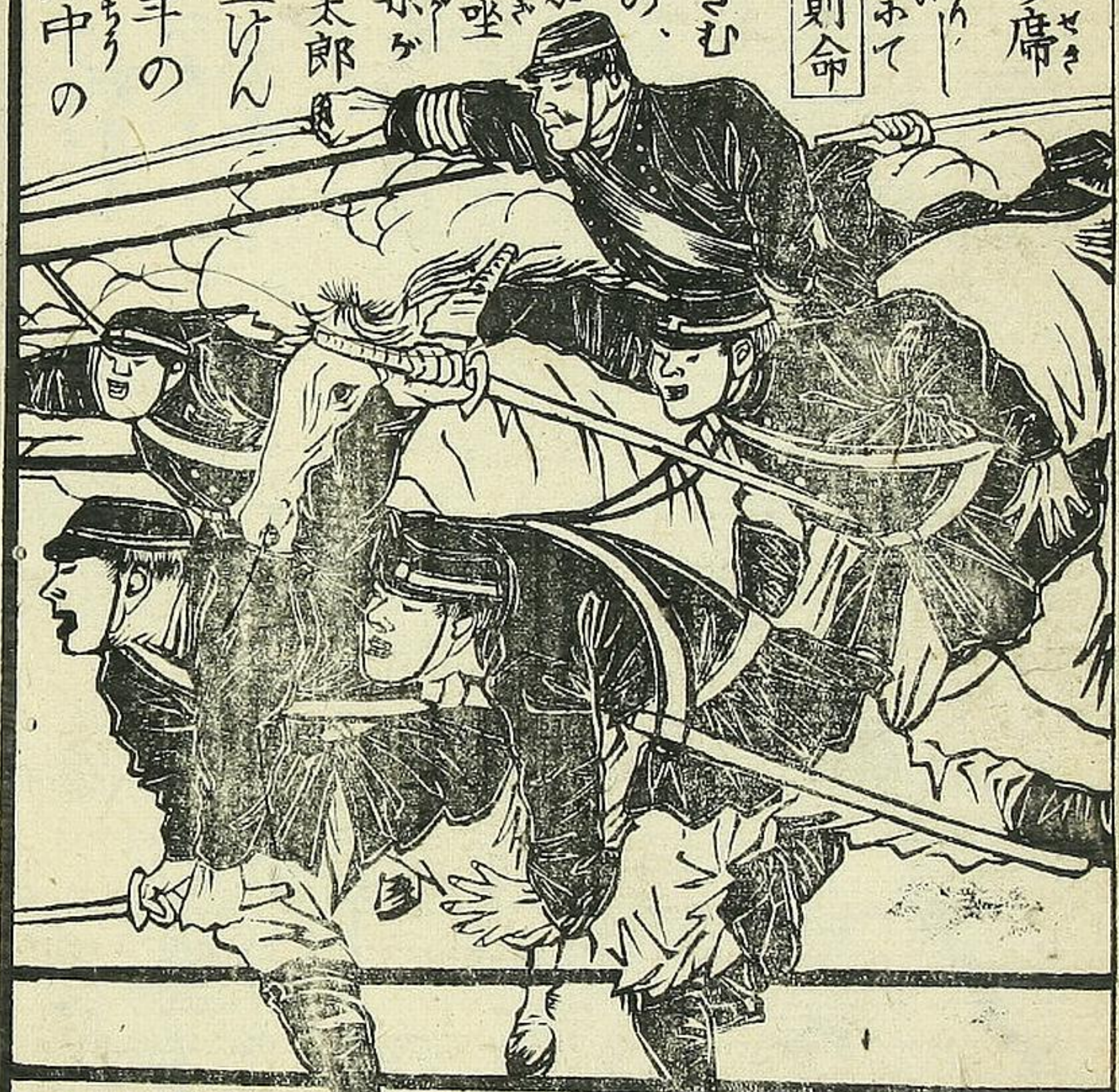
の

酒宴の席

時大盃おて

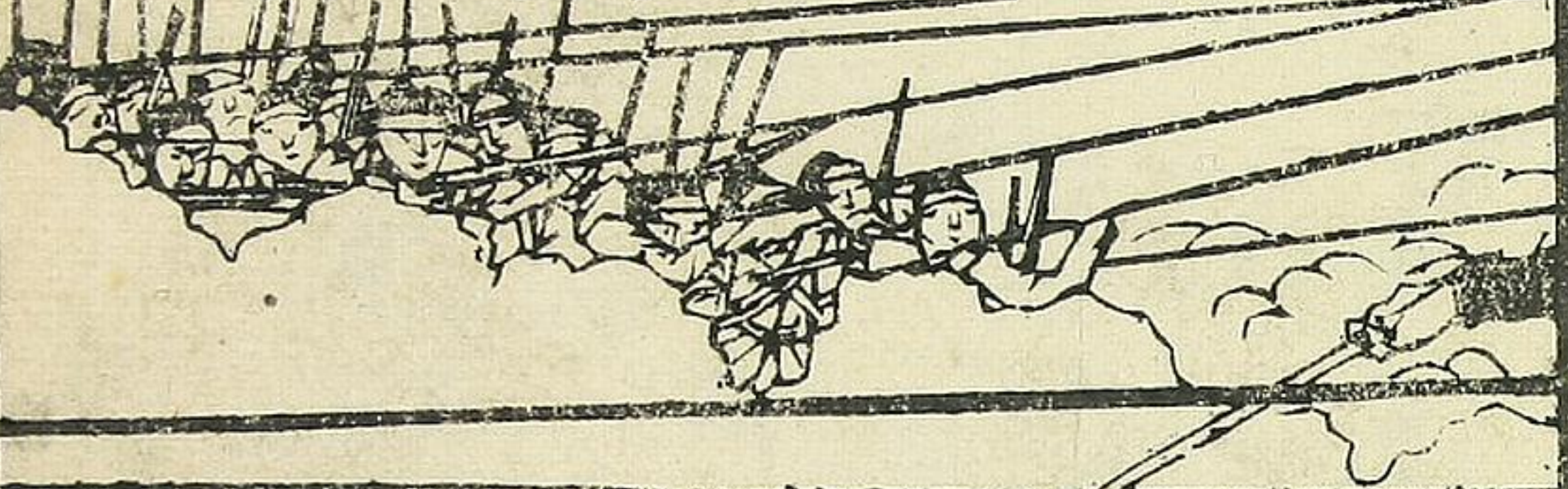
安藤則命

数杯とさむ
け得意の
色の見え
し其坐
不有 某か
兼て宇太郎
と聞置けん
彼が少年の
折ふ藩中の



も賊徒等
延岡と落ちて
且戦且
走り
向の三田井
入りし爰
向と定
めんが為
此地の肥後豊
後の各地へ趣

の誰彼
いふ事
り
く
改名致し度
申て居ると言
ひ出
酒の機嫌
通



進む
て鹿兒
島縣令
の飛信
不
服の徒自
徒へ去り全
敢死の共
と以て鹿兒島
突出と志

まけて乗船せんの
目的(十日以前)確
定せらば如く
假令

市中
意外
巨額の糧と
無き小相違
いあり



日向の
蕩り耽
論起り
斬

宮寄小居
既小絶交せんと
て自二派
再延岡小突
軒々議論一和
景況と探
麻兒島

命限
其目的



入る小及んで
賊の助けと
べき物の焼拾
せらぎ
ある
家小又
賊將
桐野
利秋



と万小達
る事もあら
かと遂小此度
の拳小及び
も野津少將
後肥後路
へ入らんと
いひ賊徒
が実の望とあら
何時か再麻兒島
敢死賊徒等
庶兒島へ突入

野津鎮雄の金



盛返
えんと
まるふ
らんり
此方
面ふ向ふ者へ
戦ひ極
て難
儀

あらんと豫言
せり身て一ふとてまゝく賊へ
突入ある由扱も賊將の

野津鎮雄
大隅の地と針
ふ駈抜て麻兒島へ撃ち
入りあるべし然るも縣



内でも追々事のあらざる悟て
降伏お出る者多く桂壺門へ
八千の兵と共野津少將
本營お降伏ありをふ又
賊徒ふ言ふらんて事
の成ざるも察し飯野如
久藤迎へ出たる項へ恰も
降伏人が官軍の
頼門お起く体にて
五六百人通行し失庭
の小林の警言察所
と察し由ある

野津少將の本
營桂壺門降伏

官ハ疾立
退き兵士
ハ各所と守
禦して賊徒
と撃つ准
備とあり
綿貫少
警言視も
又米倉を
假の本營
として専
攻守の
策と廻ら
す

桂壺門

唐守島金定金

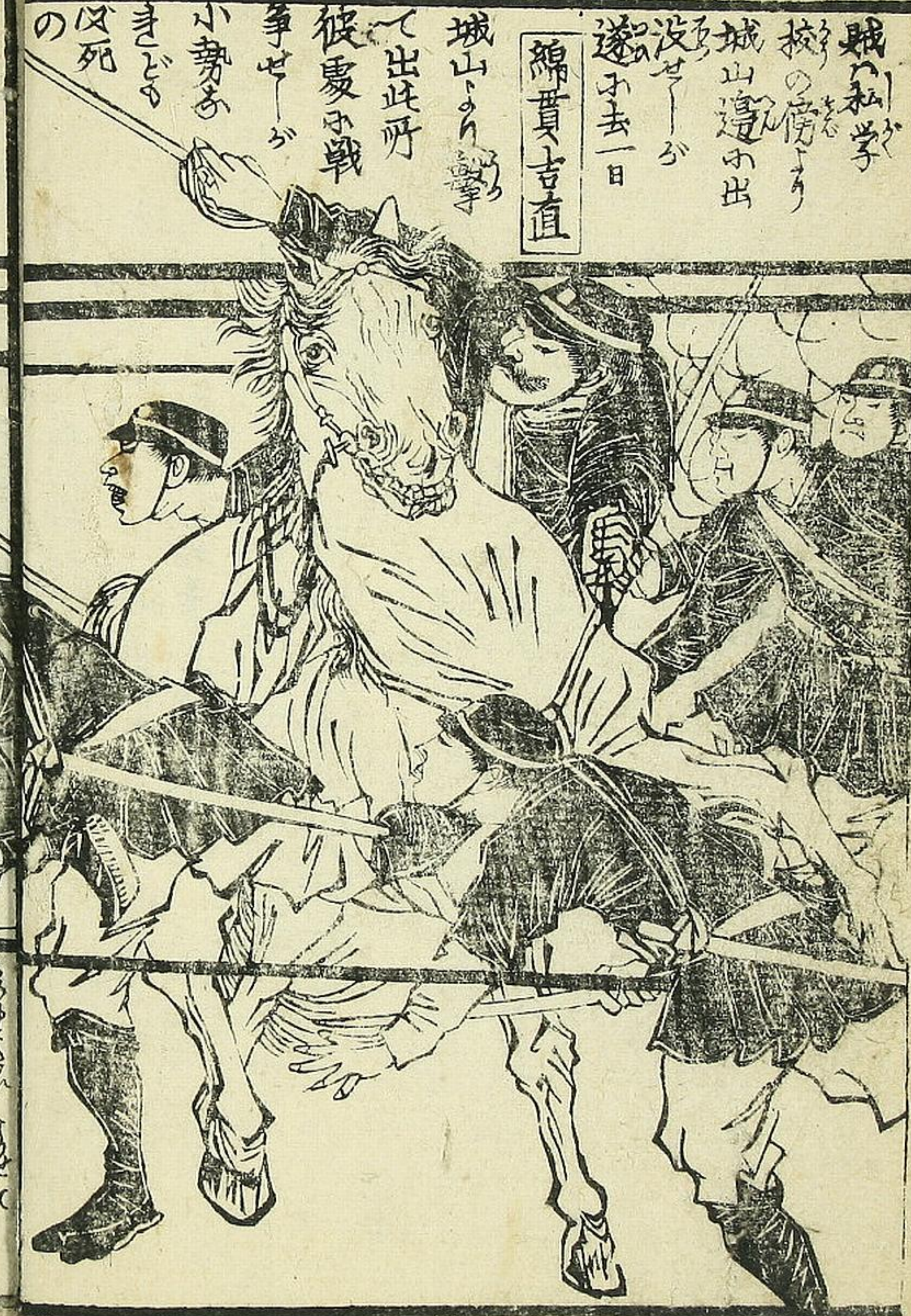
賊の私学
城山邊の出
没せしむ
遂に去一日

綿貫吉直

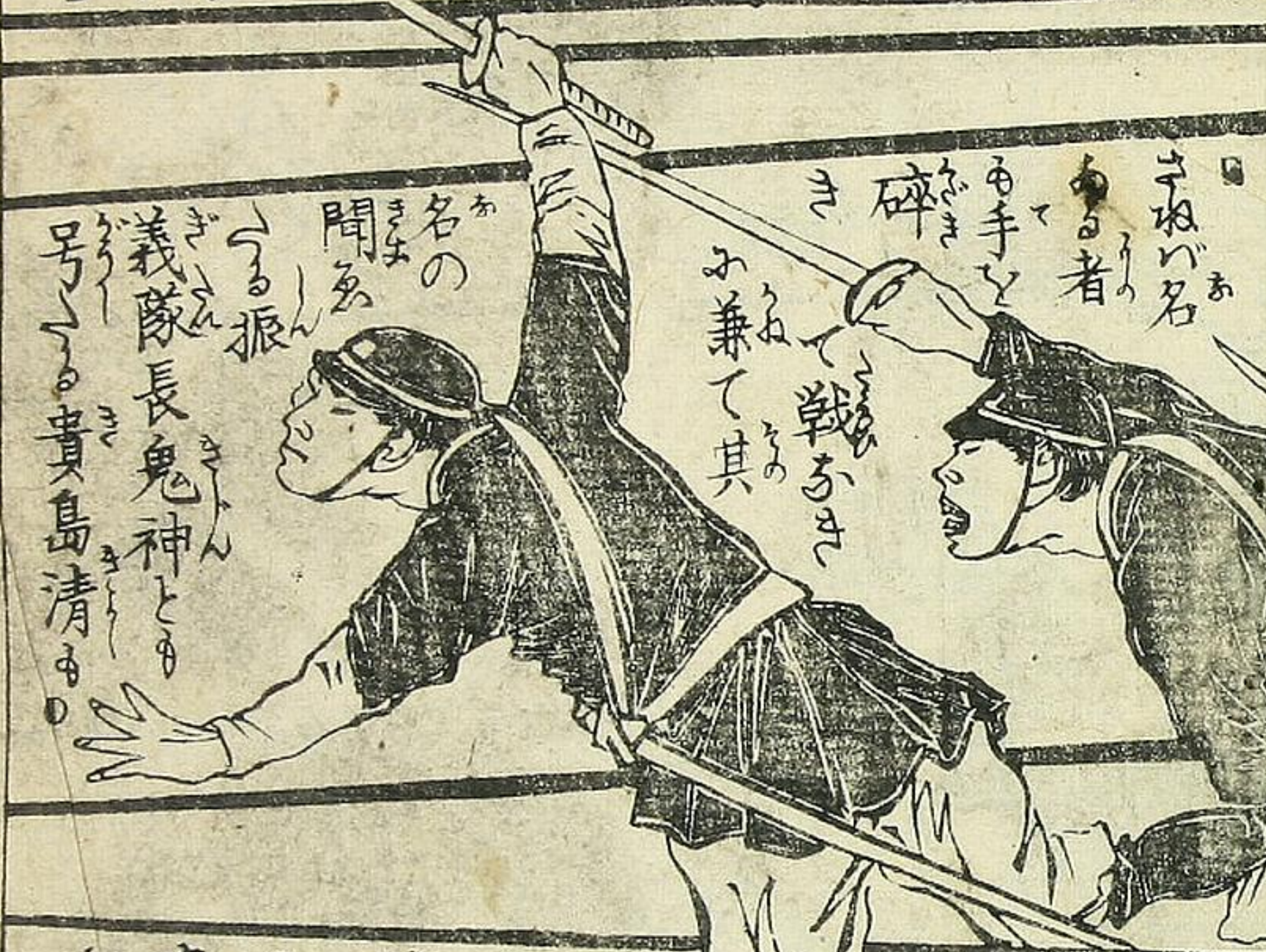
城山邊の出

て出此所
彼夏小戦

争せしむ
小勢あり
まじり
の死



の兵ある左様
或は抜刀の切入
銃と連發し
突入せんとする
各と戦狀各所
同一からねど
官軍の侮ら
せし能防
お却て賊徒
へえり
戦ひしも
出



名のか
義隊長鬼神と
号する貴島清也
聞え
つる振
さぬ名
者
の手
碎
戦ふ
兼て其

岡本隊へ前手の
中を指揮する
と遂に撃
と云へ餘
の賊将等の
勢ひも今の大
衰へけん河村参
軍の警視隊が
所の引上と命せら
ま専に残賊追捕の
事
綿貫氏各所の
賊と防戦する

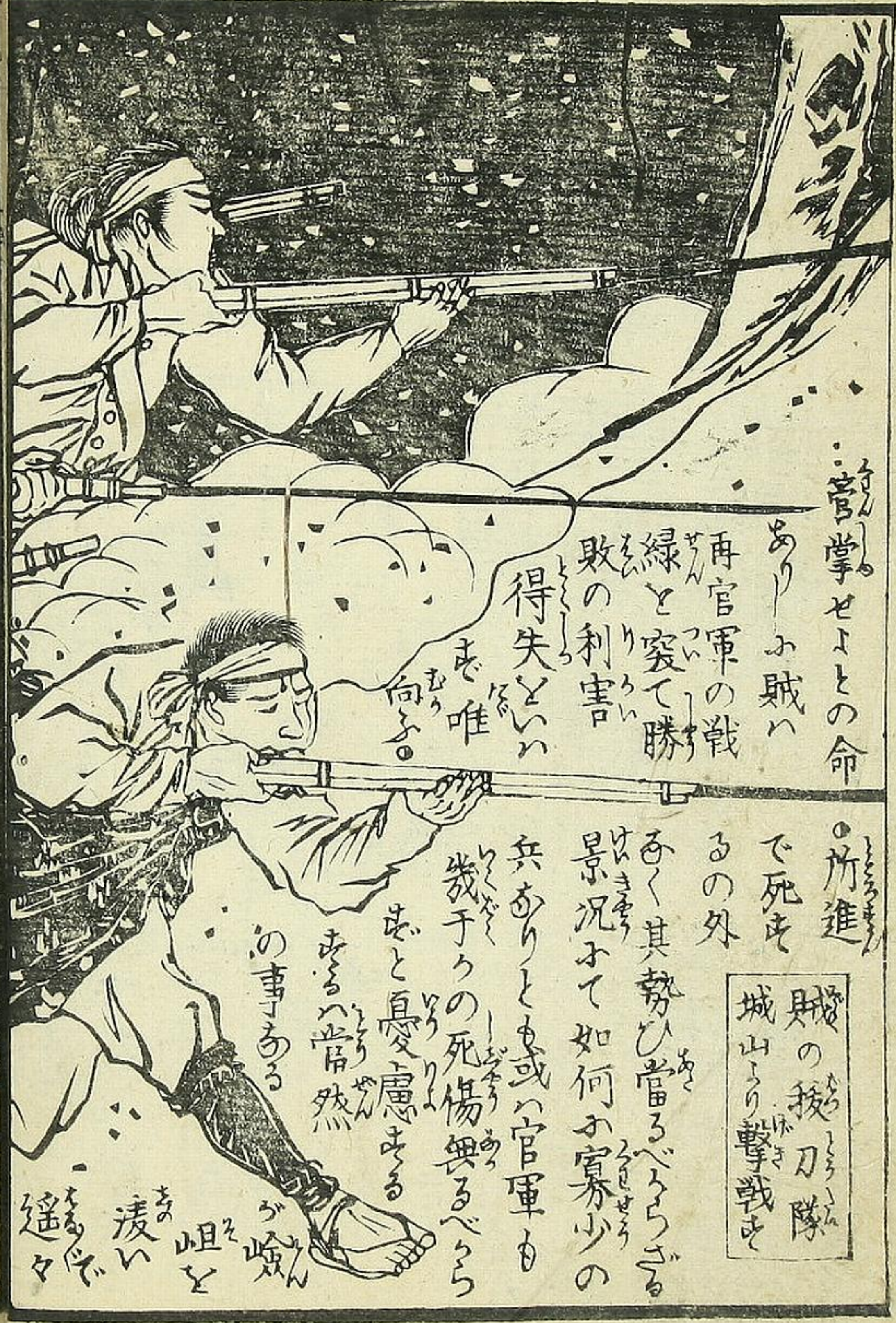
見島真定



永山九成

浅井直之進

盛返
 するふい
 いもゆら
 心し
 賊も散
 乱して
 最初城
 下より
 出て
 跡會



管掌せよとの命

ありふ賊ハ
 再官軍の戦
 緑と突て勝
 敗の利害
 得失とい
 唯
 向ふ

所進

で死
 るの外
 多く其勢ひ當るべからざる
 景況にて如何に寡少の
 兵ありとも或は官軍も
 幾于りの死傷無るべから
 志と真慮
 みるハ常然
 の事ある

賊の抜刀隊
 城山より撃戦

嶮
 嶮
 凌い
 遙々

唐島金屋

唐島録

賊の勇將
戦ふを

の官軍
本官と取接
て改め寄せ
官軍が以前
築きこむ
壘小據り
て砲戦
等数度の
戦ひふゆ
利をけられ
是と限りて



より二ツ山と見ゆ
山上に數名徘徊す
ると其筋の依り
ふ小官賊あるや
ら流と重巡査先鋒
とて繰込めし成
貴島清
時谷山
▲當所人民多くて
穩あらし依て八
方の手配鎮撫

西海劉如盤

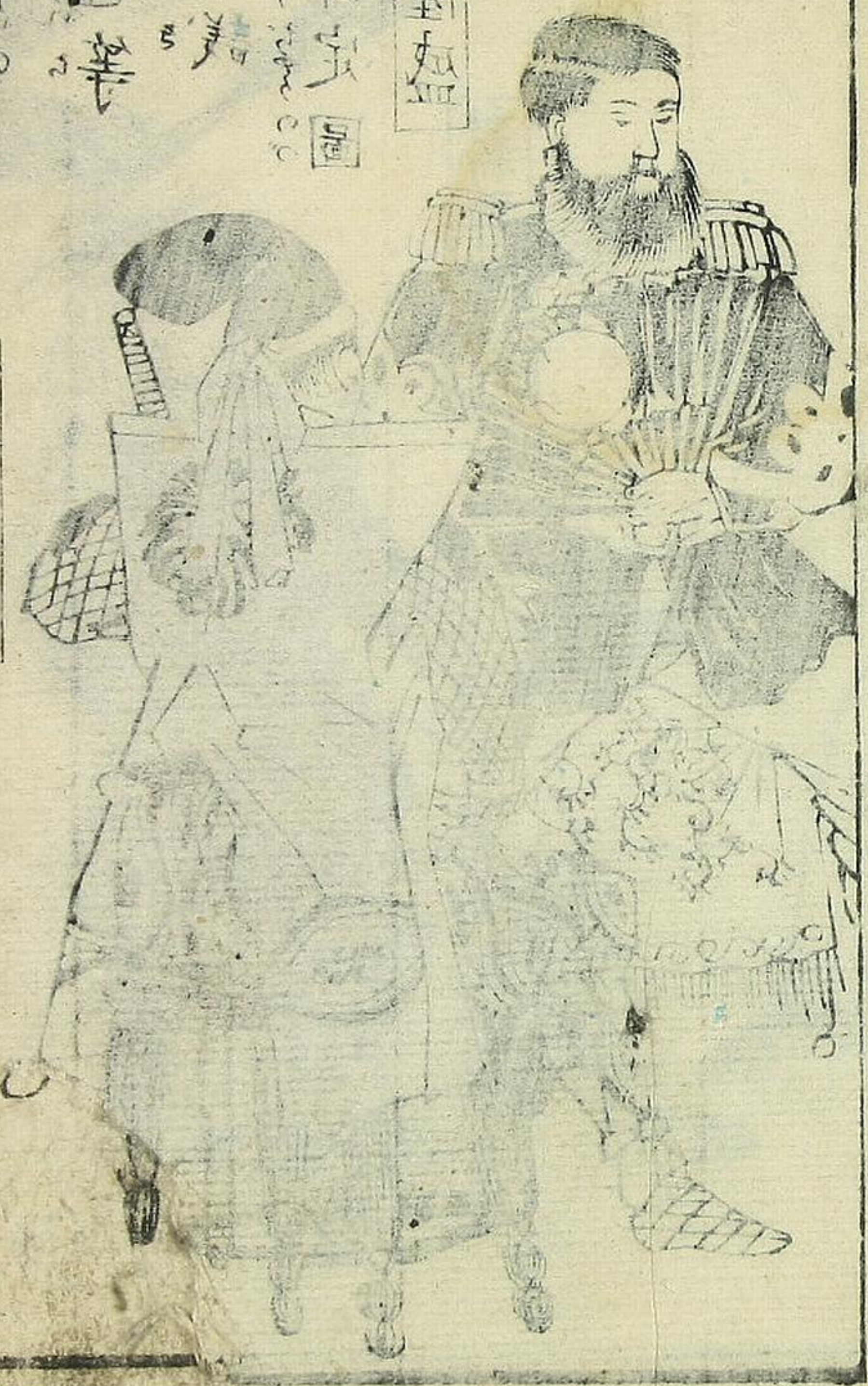
信玄圖

軍書

烟燧等

唐島録

陣理陣外





篠原國幹

名手

是と
草
利



桐野利秋

西郷隆盛

鹿兒島の
賊魁等
軍議
評定圖

ニッ山と見
敷名能
依

田原坂の戦

鹿見島の士はと維新の
 初戦功を立て陸軍少將
 小任せり終るに西の隆盛
 巢里小歸らふ及て共々
 帰國せしが今回逆
 徒首謀の一か加る
 肥後國王名郡
 田原坂の
 於て官
 軍の銃丸小中り
 没命せりとす



村田新八

田原坂の士は
 性たさる驍勇不抜
 鎗刀の技み長し
 其名天下にふる
 けり茲は共智力い
 少く劣るる処あるが故に
 順逆の大差みらるる遂に逆謀
 小黨より肥後國植木町に於て
 右手に銃丸をうらるといふ
 幸はして死去せむることをえり

名 傳 刀



金平

伊藤直二

島津久光公の家臣にして
 高輪の邸に勤番の節
 ある夜分山下と追刺
 かつひ議論して金
 とをわらわの英雄と
 然るに西々等の説は
 狂惑これ大義と誤り
 官軍は抗敵
 せしこそ



表は
 ちゅう
 けい

西郷小平

隆盛の舎弟ありて島津公の近臣
 ありて勢力人にまをさるる且才畧ありて
 暴挙の初は
 當り良策と
 述ると金も首謀の
 者其説を拒む
 と以て口を喋り
 惜まの遂に熊
 本城下よあつて
 戦死せり



貴島卯太郎

唐見島の士はて人ときり

武と好と鎗刃の術

又長と常小大刃

と帯以頗る俠客

の風とほ弱と助け強と

押へる癖あり初西のとい

説合るを以て却て西のと

そり嫌疑とらけーに

今般西々より再三の依頼と

らけ選ふ黨せーとのみ



伊集院権右衛門

島津公の巨みく武術小

長とたれども智畧に疎く

西々あると知て政府あること

知とさるが昔の如

故小大賞順逆の

弁へるく最初

より西々隆盛

にらこく官軍に抗敵



野村十郎太

生得水練の妙を得て海路の
測量術を委く且豪放な
沈黙なるが故に今度暴
徒ふらふに本年一月廿一日

より二月一日二日おつろ

学校黨を帥ぬ

月無下の弾

業庫より入り物品

と奪去しつゝ

この十郎太あり



中根米七

旧若松縣の士族のみ唯
豪勇ありて智術を乏し

明治九年日縣士族永岡

久茂と共に小府下の巡査

小敵對し技刀に及び

変るるがごとく慮見島

を以てする

西々の事々挙る

あり其群は加り

一方の隊長とあり



原一格的

前原一格

山口縣士族前原一誠の

第あり明治九年日

縣士族暴挙あり

更ありて捕縛

のどり一格

鹿鬼島

のうら

今回西々か

挙よんじ

各所の戦り

勇猛とありたり



肥後助右エ門

島津公の側用人とのあ知

行百五十石と食む明治の初め

総督宮におもひ東下して

戦功あるを以て賞典禄を

辰守くせりされと官の

登庸せり

遂ふ

而やにん

賊名を負ふたり

名



山口右五門

生質詩哥著謙と好
頗る優美の人よく文

志厚く五常の
道と守る事を専務と

以然れと頑固の癖あり
故より順逆のころきつめり

たの... 遂小西るよんじ
可肥の各所に於て

あつて官軍に
抗敵すといふ



高城十二

明治の初年勅王の兵
必加ふる奥羽追討の節に

會津攻城の先陣を以て
平定の後賞典禄を

あまをり旧里に引らり
居り官の登庸多しを

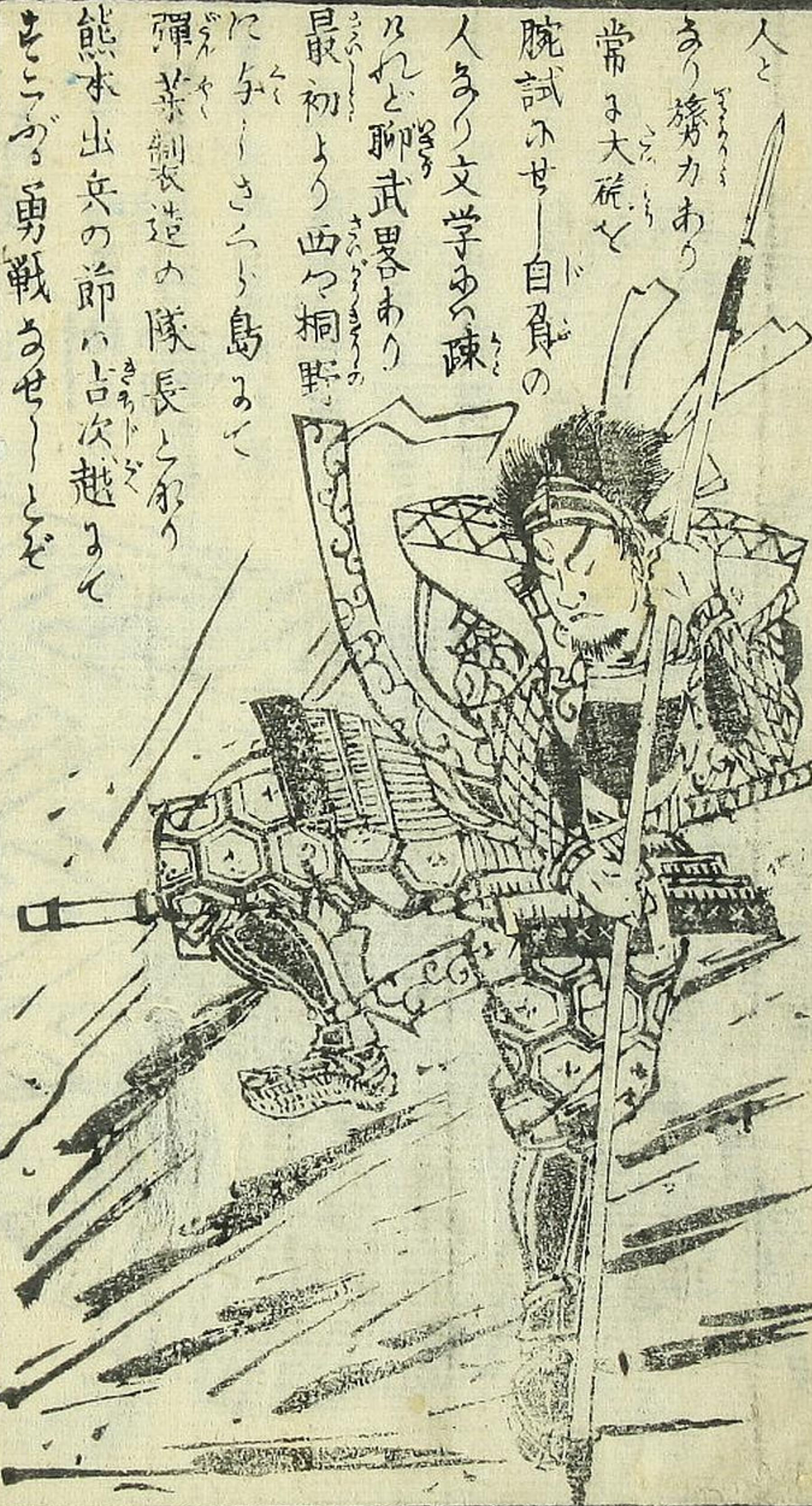
不平よあつていよや
今般暴挙に...

官軍に敵對し
汚名を千載に



房山... 金

浅井直之進



人と
あり精力あり
常子大砲也
腕試のせし自負の
人々の文学あり
及れと聊武畧あり
最初より西ヶ桐野
に矢ささる島まで
彈葉製造の隊長とあり
熊本出兵の節に吉次越よて
とこつ勇戦をせしとぞ

明治十年八月九日御届

發兌明治十年九月

編輯者 西野古海

第四大區一小區錦町二丁目五番地

東京

出版者 木村文三郎

第一大區十二小區馬喰町二丁目一番地

書林

010190507900

郡馬縣管下
查尾氏